

## 満州神武屯国境警備の思い出

山形県 清水 繁 雄

私の家は父母、弟、妹二人の六人家族でした。宮内尋常高等小学校を卒業、続いて宮内青年学校に三年、同研究科一年を卒業し、家業の建築業を継ぎ三代目でした。

徴兵検査は第二乙種で第一補充兵役となりました。昭和十六（一九四一）年四月十日、北部第十八部隊（山形）に入隊の召集令状がきました。町から二人です。入隊まで一週間ぐらいありましたので二人で赤湯温泉の丹波館へ二泊三日の予定で行きました。

出征の前夜は立振舞で親族、友人、近所の人たちの送別会で盛り上がりました。翌朝早く、親父と三宝の水盃を酌み交し、家の前で万歳三唱で出発、熊野大社の神前にて御祈祷して頂きました。

北野宮司さんより「戦地に行き、斥候や伝令等で

道に迷った時には必ず熊野大権現様が現われ、道案内して下さる神様です」と諭されました。引き続き小学校の体育館で壮行式が行われ、正面には天皇皇后両陛下御真影、両側には澤口校長の揮号で三尺巾の垂幕には「一億一心」「皇運扶翼」と書かれておりました。園児や児童女学生、町民とそれに十二、三人ぐらいの楽隊に送られました。

当日は山形の旅館に一泊、翌日入隊です。これは前日の行事のためでした。入隊当日のお昼は赤飯で、三日間ぐらいは厳しいこともなく、良い軍隊生活だと内心喜んでおりましたところ、翌日の起床ラツパ後は目まぐるしいぐらいいい気合が掛り、ちよつともゆるがせに出来ず、入隊した以上は致し方ない、我慢で軍隊生活になじんで行く外ないとい決心しました。

「軍靴があいません」と言いますと「足を軍靴に合わせろ」と言われます。そして班内、食事、教官室、下士官室などの一週間ずつの交代勤務です。上下番の送り時には先任上等兵の立ち会い

ですとスムーズに終わります。しかし留守で一等兵の方ですと、上番者員数申送り、下番者申受け等には立会人を中央にして、員数一つでも無くすることは出来ません。暗記して声の高い人、記憶の良い人を選ぶのですが、立会人の悪質な人ですと、前列と後列の人を交替させられ、すると緊張のため間違いを起すし、声は低くなる、ビンタは科せられるなどさんざんです。私は笑いたがる方です。歯で舌をかむので痛い但我慢します。

兵舎は全部二階建てで、消灯ラッパで寝ると柱の割目から南京虫が出て来て血を吸われる。痒くなり掻くと化膿する。虫は足でつぶすと臭い。廊下の電気は暗いし、班内の電気は、虫が早く逃げるので点けられません。鉄製の寝床の虫卵駆除で二十日間に一回ぐらい営庭に運搬しいぶし焼きします。二人で寝床を階段、踊場、階段と四回ぐらい往復で、八回もしますと手の甲が赤くなり、痛く汗も出てきます。

二階の一班より四班まで、階下は五班、六班ま

でと下士官室、兵器倉庫、被服倉庫等があります。剣吊ボタン掛け忘れてビンタ、眼鏡をはずさせてはビンタ、剣吊にバケツ下げさせて一班から六班まで叩きながら回って来いと、戦友は拍手して笑うほかありません。自分がしなくても誰かするだろうと、この横着な気持ちに分かると、バケツに水を入れ五分間手に持って廊下に立っていると云われることもありました。

宮内町から召集された二人は歩兵砲中隊に編入され、私は連隊砲の特業で、一人は速射砲でした。大砲の部品名覚え、分解、組み方、接合の時、ちよつとでもかちあう音がしますと、長さ一メートル、直径二センチの鉄棒で鉄兜の上から叩かれる。痛い但我慢して戦友に痛かったと言いますが、本当は痛くない助教官の叩き方があると思えました。助手でも良い人悪い人がおりまして、初年兵には影響甚大でありました。

テストである程度覚えて来ますと十メートルぐらいから走らせ、「右二五一分角、あるいは一八七

分角、距離三五〇〇」と言われ、砲を操作して「良し」と言うまでタイムを計られます。照準器には揚げ止めと下げ止めもあり、間違うと砲身が多少動くので嘘と分かり、鉄帽の上からゴツンと叩かれます。

ラッパの音も口ラッパで音を言わせ、覚えさせられます。起床、点呼には早い物から列に並び、これも古参兵より先に並ばなければ駄目です。体重が八〇キロ以上ですと食事や下給品など二人分支給されます。炊事場に食缶返納時に飯を盗むところなどが見付けられると大変なことです。

中隊の内務規定に従って整理、整頓、帯剣、雑のう、水筒、防毒面、軍帽、鉄兜、偽装網などは折釘に順序良く、長さも一定にして下げ、衣服、外套、天幕、雨具も同じです。消灯ラッパで休息時、寝台の脚は一線にし右脚より左へ二十センチ離して上靴の先端を揃えます。寝てから夢を見ることは勝手ですが、起床から消灯まで何一つとして勝手に出来ず、すべて命令と班との競技です。

敵に勝たなきや自分が殺される、日曜以外は競争競争です。連隊砲と速射砲の兵隊で勝抜き相撲大会で私が準優勝しました。

昭和十六年六月、城南練兵場での一期検閲終了の翌日、北村山尾花沢演習場へ往復夜行軍に出発しました。日数は十五日間で、目的地に到着しました。猛演習で、戦場にいるより苦しいのではありません。演習中教官より「分隊長戦死、清水代行せよ」との号令で私は分隊長の代行をしました。

軍隊の体操の目的は、心身を鍛練して軍事諸範要求に適應する体力、気力、とくに持久機敏の運動能力の養成にあります。不動の姿勢は軍人基本の姿勢で常に軍人精神が内に充溢し、外に厳肅端正なることです。

連隊砲の直接照準は目標の中央下端ですが、間接照準は丘とか山の後からですので、観測班より距離、角度、分角度を教えられないと分かりません。教官から二日間観測班に行つて教わつて来いと言われ側遠器、双帯鏡の教育を受けました。「標

定点は明瞭にして照準容易かつなるべく遠き物を選び、消滅移動の恐れあるもの、紛れやすき物は避ける」にあります。

検閲では砲手三人、弾薬箱八人、学科質問三十五人で私は砲手で射手でした。普通、大砲は馬で引張る訳ですが、時折引き綱での駆足となりますと苦しく、汗を拭くことも出来ません。休息の時、百メートル前方の木を触って来いと駆足をさせられます。触らずに来た者は助手からビンタで、また駆足をやらされる。教官は双眼鏡で見ますが、二回目は必ず触って来ますので双眼鏡は見ませんが、こうして昭和十六年七月十五日、陸支機密第二五四号第四頁に依り召集解除で帰家しました。そして昭和十六年十二月八日、前日の仕事の残りがありましたので朝早く女学校へ行き、仕事を終えて小使室で朝茶をご馳走になっている時、ラジオで真珠湾攻撃のニュースがありました。私は二回目の召集は必ず来る、今度は外地であると信じておりましたところ翌年五月十五日入隊の令状

がきました。二回目の召集の時は宮内町からは四人でした。

昭和十七年五月十五日、歩兵第三百三十二連隊補充隊に応召、五月二十八日、山形出發、歩兵砲中隊として五月三十日宇品港出航。六月一日、釜山港上陸、六月三日鮮満国境通過、六月六日北安省北安。同日歩兵第三百三十二連隊に入隊して歩兵砲大隊本部指揮班に編入されました。私は一回目召集時の軍歴に関係していると思いました。六月二十日、黒河省神武屯に移駐、昭和十七年軍令陸甲第十八号により第五十七師団の編成が下令されました。

昭和十八年八月八日、齊々哈爾第四野戦建築隊派遣を命ぜられ、九月十六日、黒河省納金口子に派遣のため出發、九月十七日、納金口子に着き国境警備、十一月二十日、任務終了して原隊復帰しました。

昭和十九年一月、一緒に召集された三人は南方戦線へ転属させられ戦死、ソ満国境警備中、精勤

章三回頂く。また本部對抗の連隊銃剣術大会にて春秋二回優勝する。九月十九日、連隊長より陸軍善行証書付与され、十月十五日復員完結、十月二十日召集解除となり帰家する。

すべてにわたって他人に負けること自体絶対嫌でありました。教官、助教、助手からも私に良くして頂きましたが、私も出来得る限り尽しました。一番で一等兵進級、代表して上官に申告、上等兵には二番、兵長にはまた一番で申告しました。上等兵時代には特別下士官補充要員として四十日間の教育を受け、演習、学科を終了して兵長になりました。

関東軍進級規定では下士官には兵隊三年間、兵長には六カ月で下士官になるのが最低の基準です。また進級には特例進級、抜擢進級、定期進級の三つがあり、私はテスト二回と実兵指揮一回で下士官に進級になりました。指揮統率力は五十人の兵隊を動かし、号令が間違えますと兵隊が動きません。その都度大隊副官より低い声で号令の種類を

言われます。

第五十七師団歩兵第三百三十二連隊歩兵砲大隊本部指揮班の通称号は奥第七三三二部隊です。第二回の召集で大隊本部となり、教育を受けた連隊砲には触った経験がありません。

北安から神武屯への移駐には本部は客車ですが一般兵隊は二段床の貨車です。山形の連隊は約一年間、予備連隊の形態だったと思います。というのは黒河省山神府に師団司令部があり、ここに青森、秋田の歩兵連隊、野砲連隊、輜重、搜索、野戦、重砲の各連隊などほとんど集結し、山形の連隊のみが北安だったからだと思います。

お月様は一つですが、日本で見る月に比して大陸で見る月は二倍半ぐらい大きいです。神武屯駅から汽車で黒河駅まで外出して、夕食時間までに連隊に帰隊しないと重営倉です。黒河の町は南満州鉄道の終着駅、酷寒時は普通氷点下四〇度でちよつと風がありますと一度半ぐらい体感温度が下がります。

ある時指揮班、輜重彈藥班、糧秣班が集合させられ、大隊長より一カ月前の「入隊式当日における連隊長並びに大隊長の訓辞を覚えている者はいるかと言われ、私が手を揚げました。結果は「よろしい」と誉められ、官等氏名の質問に対して「陸軍二等兵清水繁雄」と言いましたところ、大隊長は「次郎長か」と言われ、将校たちの笑いを誘いました。こうして私の名は一番早く覚えられました。

駐屯地の神武屯は、九月中旬には霧が降る場合もあります。十月には師団の十五日間の演習があり、このころは相当に寒くなつてきます。私は前日の朝汽車で出発するので楽です。

連隊の将校の演習、現地戦術の手伝いとして作戦の原案、地形の判断、敵の状況変更による我が軍の判断や処置等がありこれらの伝達のため懐中電灯での駆足です。

秋冬期の師団の大演習となりますと軍旗が出動します。どのような悪天候であっても作戦は遂行されます。命令受領の例では連隊副官より口頭で

伝達される作戦命令「甲一〇五号歩兵第三百三十二連隊命令。一つ第一大隊は一時間の大休憩後、第三大隊と行進順序を変更すべし」というものです。

設営で大雨の場合、天幕の鳩目から雨が洩れると服は濡れ、小銃は汚さないように気を配る。大休止一時間でも二十分ぐらい休んで先発隊として出発し、地形、水源の場所、軍馬の繋ぎ場所の選定をして、これを後続部隊に案内する。本当に忙しく夢中で体を動かせる外ありません。夜九時ごろになると明日の飯を今夜中に大隊長の分を入れて三食分作ることとなります。

将校弁当容器では炊かれませんが飯盒で三回炊く、大隊長の身辺世話をしして出発準備をします。靴下は毎日交換、襦袢、股下等は四日ごとに交換します。冬期大演習となりますと行軍三十分に分の休憩で、体が冷え、凍傷にならないように行軍します。

飯盒のカバーはコールテンの内側は動物の毛皮ですが、飯は凍っていますので携帯燃料で暖めま

す。馬に与える水は雪を解した水です。設営に張る網の鉄杭は直角杭で、鉄槌で打ちますと曲りますので、雪をかき集め湯をかけ凍らせて立てます。

夜は狼の遠吠えです。馬繋ぎ場所では焚火で警戒します。乗馬の将校は厚い外套を来ていますが寒い寒いといえます。腸チフスにかかりますと脳が熱で犯され死に至ります。私は大隊本部です。で軍旗の側にいるのですが触れたり広げて見るなどとは出来ません。出来るのは連隊長と連隊旗手の二人で、昼夜軍旗衛兵が守っています。また、連隊には総出の演習日があり、勤務以外の一般兵は必ず演習に出場しなければなりません。初年兵は特別教育があり対象外です。屋外天候不順の場合に使う操練場は百五十坪の建物で、中は土間で、銃剣術や戦闘訓練等を行います。

### 【解説】

体験記筆者は、大正九（一九二〇）年生まれ、

昭和十六年四月、臨時召集により歩兵第一三二連

隊歩兵砲中隊に編入され、六月第一期の教育を卒業して七月に召集解除となる。

追って昭和十七年、第五十七師団の編成に伴い、同年五月、臨時召集により同歩兵第一三二連隊補充隊に応召、山形―宇品―釜山を通り、六月三日に鮮満国境である安東を通過、六月六日に北安省北安に着く。

直ちに原隊の歩兵砲大隊本部に編入され、同地の警備に就いたが六月二十日に黒河省神武屯に移駐となる。二十一日に神武屯に着き、以降同地の国境警備に従事する。

昭和十八年八月、齊々哈爾の第四野戦建築隊に派遣を命ぜられ、十一月に同地に着く、さらに九月には黒河省納金国子派遣となり、十七日に到着、十一月二十日まで国境警備の上、神武屯に帰着す。

神武屯に駐屯中には、筆者が記録するように、「精勤賞」「連隊銃剣術本部対抗競技会優勝」などを付与されている。

昭和二十年四月一日、本土防衛のため転用され

ることとなり神武屯を出発、鮮満国境の凶們を通過、北朝鮮の羅津より博多に入港、福岡市周辺及び同県糟屋郡青柳村の防衛に当たり終戦、十月十五日、召集解除、復員する。

筆者は、歩兵第一三二連隊歩兵砲中隊時代、北満軍司令部所長の黒河省孫吳付近の行軍での体験を次のように記している。

第五十七師団の大演習で、行軍での到着地点まで〇時〇分と命令されると、その強行軍のために軍靴の半張皮がはがれ、足底には豆が出来る。その夜のうちに治療しないと翌日には落伍兵となり後方へトラック輸送される。また空腹と疲労、余計な事は何ひとつやりたくなくなり、装具の点検、兵器の手入れが精いっぱい。夜行軍では乗馬の尻尾につかまり、眠りながら歩く。すべての輸送は馬で、酷寒時には馬ソリで行くが行李班の苦勞は並大抵ではない。

#### 歩兵第三十二連隊部隊歌

一 永久に揺るがぬ月山の 雪溶けをそそぐ最

上川 濁りを知らぬ心をば うけし羽陽  
の健男児

二 嗚呼時二千六百年 畏き軍旗賜りて

七度生まれ尽さんと 魄のみ盾の榮に泣  
く

三 破邪の劍を振りかざしすめら戦さの征と  
ころ 民聖恩を仰ぐとき 北の守りの我  
が使命